

1 いじめに対する基本的な考え

いじめの定義

「いじめ」とは、「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」をいう。（いじめ防止対策推進法 第2条）

いじめは、受けた生徒の教育権を著しく侵害し、いじめに関わった全ての生徒の心身の健全な成長及び人格の形成に大きく影響するものである。また、いじめほどの集団にも、どの生徒にも起こりうるものである。生徒の心身の安全と命を守るために、決して許してはならない反社会的な行為である。

生徒は決していじめをしてはならない。そして、いじめの防止等は、全ての教職員が自らの問題として切実に受け止め、徹底して取り組むべき重要な課題である。

2 いじめ防止の基本方針

- (1) いじめは深刻な人権侵害案件であり、決して許してはならない。
- (2) いじめの防止は、教育活動全体を通じて行う。
- (3) 全教職員が未然防止・早期発見・的確かつ迅速な対応をとる。
- (4) いじめの防止は、小中学校間、保護者、地域、関係機関の連携のもとで取り組む。

3 いじめ防止の施策

(1) 基本施策

- ① 学校の経営方針を受けて「いじめ・不登校解消と未然防止」を掲げ、年間指導計画に基づく組織的な未然防止、心に寄り添う支援・指導に取り組む。
- ② 全ての教育活動を通して社会性の育成を図る。
- ③ 豊かな情操と道徳心を培う道徳教育と人権教育の充実を図る。
- ④ 小中9年間を見通したいじめ防止の取組や、保護者・地域・関係機関との連携による取組を展開する。
- ⑤ 研修等により教職員の資質・指導力の向上に努める。

(2) いじめ防止に係る組織について

- ① 当校の現状を考え、いじめ防止に係る対策委員会の機能を校務分掌上に規定されている生徒指導部会に加える。
- ② 生徒指導部会でいじめの事実が確認された場合、及び可能性がある場合において、関係教職員を加えて「いじめ防止対策委員会」という名称として組織運営をする。
- ③ 本委員会は、校長・教頭・教務主任・生徒指導主事・各学年の主任・養護教諭・特別支援教育コーディネーター・関係教職員により編成する。なお、前出の校務分掌は、兼ねることを可とする。
- ④ 本委員会には、必要に応じカウンセラー等を含む外部の助言・支援者を同席させることができる。その場合、校長が命ずるものとする。

(3) いじめに係る生徒指導部会といじめ防止対策委員会の活動内容について

- ① いじめ防止に係る年間指導計画の作成。及びその評価。
- ② いじめ事案が発生しそうな場合における防止のための取組検討。

- ③ いじめ事案に係る生徒の情報交換。対応についての相談。
- ④ いじめ実態に関する調査についての打ち合わせ。
- ⑤ 保護者や校外の機関との連携に関する相談。
- ⑥ スクールカウンセラーの活用やいじめ相談窓口の設置に係る相談。
- ⑦ いじめ防止に係る教職員の啓発活動や研修についての相談。

(4) 具体的な施策

- ① 生徒指導部会を中核として、いじめ防止学習プログラム・中1ギャップ解消プログラムの着実な実施、及び定期的な評価の繰り返しによる改善を図る。

学校評価では、いじめの未然防止に係る取組、早期発見の手立て、いじめ事案への対処について項目を設定する。

- ② 校務分掌では、社会性育成に係る組織を通して、生徒を前面に出した教育活動や、思いやり・支え合う活動を取り入れた学習を設定する。
- ③ 体験活動を積極的に導入し、豊かな情操と道徳心・生徒自身が人権侵害の加害者にも被害者にもならないために必要な資質・能力を育てる。
- ④ 中学校区の各学校が小規模であり、教職員が密接に関わり合える利点を生かし、小中9年間を見通した発達段階に応じたいじめ防止の取組の充実を図る。
- ⑤ 保護者・地域・関係機関とも連携を深め、地域ぐるみのいじめ根絶の取組を展開する。
- ⑥ いじめ防止に関する理解を深め、防止に向けての資質を高めるため、研修や講演会を計画し、着実に取り組む。

4 いじめ防止対策の具体的な取組

(1) 未然防止のための取組

- ① 学級経営の充実
 - ア ソーシャルスキルトレーニングの実施、ハイパーQ U検査の活用による学年体制での支援。
 - イ 教職員のきめ細かな見とりや教育相談アンケート、生活ノート等による見とりによる的確な支援。
 - ウ 保護者との連携の強化と学校評価を通じた生徒の実態把握。
- ② 授業を通じたいじめを生まない態度の育成
 - ア 分かる授業を目指した授業改善。
 - イ 小集団での関わりを通じた問題解決的な学習の積極的な実践。
- ③ 人権教育、道徳教育の充実
 - ア 道徳の時間、特別活動、総合的な学習の時間等での自己肯定感の育成。
 - イ 全教育活動を通して行われる人権尊重の精神や、思いやりの心の育成の取組。
- ④ 相談体制・協力体制の整備
 - ア スクールカウンセラーとの連携による支援計画の作成と実施。
 - イ 必要に応じた外部機関との連携。
 - ウ 情報の共有化と中学校区小中学校間の連絡会の設置。
- ⑤ 異年齢集団活動の実施
 - ア 特別活動・部活動を通じた協調性や協力性の育成。
- ⑥ インターネット等を通じた情報の収集
 - ア インターネットに関する使用実態の調査と使用内容の把握。
 - イ ネットパトロールとの連携による、いじめにつながる書き込みの予防と事実確認後の敏速な対応。

⑦ 教職員に対する研修会の実施

- ア 事例研修によるいじめを生まない環境づくりの能力の育成。
- イ 的確な対応、敏速な対処の方法についての習得。
- ウ 研修方法の工夫による効率的、能率的な全員研修の実施。

(2) 早期発見のための取組

① 学級でのきめ細かな見とり

- ア アンケート、教育相談（6・10月）、ハイパーQ U検査の分析による生徒の人間関係についての実態把握。事実の把握。

② 保護者・地域・関係機関との連携

- ア 保護者との密接な連携。
- イ 神林教育事務所・福祉課・民生児童委員・児童相談所等との連携。

(3) 早期対応のための取組

- (6) フロー図による。

(4) 重大事案への対処

重大事案とは

生命の危険、健康への大きな被害、精神的な著しい苦痛、または財産上の損失が大きくなる疑いや事実が確認された事案のこと。

- ① 村上市教育委員会へ速やかに報告する。
- ② 原則は、(4) フロー図に基づく対応とする。
- ③ 市教委の指導を受けながら、出席停止・就学校の指定の変更や区域外就学、警察との連携、児童自立支援施設等との連携を図る。
- ④ いじめの加害生徒・被害生徒本人及び保護者に対して、事実関係その他の必要な情報を適切に提供する。必要があれば傍観者についても、必要の有無を協議する。
- ⑤ 報道機関についての対応を誤らないよう、全職員での確認を徹底する。

(5) インターネット上のいじめへの対処

原則、文部科学省から出ているインターネット上のいじめに対する対応マニュアルを参考にする。

- ① 発見した場合、迅速にいじめの事実関係を人間関係をもとに明確にし、関係生徒への対応を検討する。
- ② ネットパトロール等に要請し、継続的な情報収集、関連事案の発生の有無を調査する。
- ③ 情報モラル教育の充実と教員の指導能力の向上に関する研修を行う。
- ④ 保護者への啓発について、ポイント等を明示しながら発信する。

(5) 早期対応のためのフロー図

いじめ（の疑いのある）情報



① 第1段階（情報収集）

- 教職員、生徒、保護者、地域住民（必要があれば）から、いじめ防止対策委員会に情報を集める。
- いじめを発見した場合はその場で止める。
- 学校の設置者が調査主体となる場合、設置者の指示のもと資料の提出等の協力をする。



② 第2段階（指導・支援体制を確立する）

- 情報収集で集めた情報を集約し、事実を確認する。
- いじめ防止対策委員会に必要な教職員を含めた拡大委員会を組織する。
- 必要があれば、校外の関係機関や心理・福祉等の専門家を招聘する。
- 教育委員会と連絡をとり、指導を仰ぎながら指導・支援体制を組む。



③ A 第3段階（生徒への指導・支援）

- 被害生徒に寄り添い支える体制をつくる。（親しい友人、家族、地域の方）
- 加害生徒には、いじめは人格を傷つける行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させる。
- いじめを見ていた生徒には、自分の問題として捉えさせる。誰かに知らせる勇気を持つよう伝える。
- 必要があれば、学級での啓発に向けた学習活動を行う。
- カウンセラーと連携し、心的なストレスに対応した支援を行う。
- きめ細かに記録をとり、その後の指導・支援に生かす。必要に応じてアンケートによる事実の把握・分析をする。



③ B 第3段階（保護者等との連携）

- つながりのある教職員を中心に、即日関係生徒（加害・被害とも）家庭訪問を行い、事実関係を伝え、今後の学校との連携方法を話し合い、確認する。
- 個人情報に十分注意しながら説明会等を実施する。
- 現状を判断しながら外部の機関、学校評議員、PTA役員等と協力をとりながら解決及び二次災害防止に向けた取組の話し合い及び実践をする。

④ 第4段階（再発の防止）

- いじめがやんでいる状態が、3ヶ月相当の期間継続していること。その時、被害者本人や保護者への面談などで、心身の苦痛を感じていないかどうか確認するとともに、日常的に注意深く観察する。
- 外部の有識者による、いじめ防止に係る校内の体制と取組の振り返り。